精神分析のはなし　第 20 話

ＪＡＭ：今日は最終回になりますね。あなたのために「精神分析のはなし」というタイトルで、お話いたします。

来る日も来る日も、私は言ったことがありますね。それはいまや過ぎ去り、過去になりました。また私が述べなかったことすべてというものもあり、それがいま形になっています。それをたぶん述べることもできたと思います。そこに存在し、執拗に言われたがっているもので、しかし言われないままにとどまっているものです。

わたしはこの縁にいて、今日それを話したいと思うのですが。思いつくままに、言わなかったことを、お話してみましょう。

まず、言われるべきものにとどまるなにかが、存在するということです。その「残りもの」は、つねにそこにあって、分析することが問題になるときでさえ残っています。たったひとつの夢であっても、夢の分析はあまりに遠くまで進むので、それは決して終わりをみないとフロイトは言っています。語は語を呼び、考えや連想は多様化して、それらはあらゆる意味・方向に分岐します。ですからつねに、闇の一点が存在していて、それは決して消えないのです。

慣れないといけません。ひとは決して完全な透明性には達しないものなのです。もっとも決然と執拗になされる解明が、未知のものに対して続けられます。あらゆる考え、全言語の原初から、あたかもあるなにかがすでに失われていたかのように、すべてが起こります。手の施しようもなく決して復元できない仕方で失われていたかのように、です。

しかしながら、ひとは前進し、それは解明されます。ひとは真理から真理へと進み、網目は展開します。紆余曲折を経たり、迷宮を迷走したりして、ひとは出口を見つけます。しかしある仕方で、あたかもひとはひとつの眼に見えない穴のまわりをぐるぐると回っているにすぎないかのようです。

フロイトは、じつのところひとは決してその分析を終えないと考えていました。彼によると、分析は中断することができるだけで、また再開するか、もしくはすでに獲得した結果に満足

している場合は再開しない。とどのつまり、じつは決してひとは分析を終えることはないのです。

ラカンはというと、逆でした。彼は分析とはたしかに終える可能性のあるもので、ひとつの真の終わりに出会うものと確信していました。そしてこの終わりについて多くの仕方で定義することに彼は熱中しました。しかし結局のところ、この終結とは、決して透明性ではなく、それは決して最終語でもない。それは決してある究極的な秘密の啓示（暴露）ではないのです。

無意識は、消えません。

フロイトが語っていた「無限」が、つねにそこに存在します。
しかしこの無限について、その輪郭を描き、こう言ってよければカプセルに閉じ込めたりすることはできます。それをべつのものにすることは可能です。

フロイトがとらえた「無限」の位置に、ラカンは「不可能」を到来させたと言うことができるでしょう。それは「言うことが不可能なもの」と呼ぶことができる「不可能」です。それはひとつの「残りもの」で、ひとつの分析全体において、残ったもの、です。それはあたかもあなたの存在の芯で、意味を欠いて、意味の外として残るように定められています。

分析において、ひとはある謎から始めます。ひとはそれを解読します。ひとは「真理」を得るのではなく、「諸（複数の）真理」を得ます。この諸真理とは、ひとが語るに応じて、多様に、無限に、変化するものです。そして最後にひとはあらたな謎、ひとつの不透明性に—これは最終的なものです—ぶちあたるのです。

この不透明性は溶けてなくなりはしない、いくつかのずれに由来するものです。「欲望」と「それについて言われることが可能なもの」とのあいだのずれ、厳密にいえば欲望とは決して明白に述べられないものです。欲望はつねによそへ流れ、文章のあいだを循環します。

またそれは「言うこと」と「享楽すること」のあいだのずれでもあるし、「パロール」と「身体」のずれでもあります。原初のトラウマのように、快の不具合—それは享楽と呼ばれ、欲

動を維持するものです—はそこからきています。

ここで、私の明快であろうとするあらゆる努力にもかかわらず—これらの私の努力はあなたにも感じとられていると思いますが—、私はしようとしたことの限界にふれています。

私は大雑把に理解されようとしました。皆さんのことばを話し、専門用語や複合的な構築物—精神分析の学問の問題を内部で話すときにひとが用いるようなもののことです—を避けました。私はフランス語で共通の語を用いました。しかしこれらの語はある意味作用を負っていたのです。それは共通ではありませんでした。

逆説的になりますが、理解されよう、了解されようとして、私は誤解について考えてみることが必要でした。そしていつもこのようなものなのです、ひとが理解するとき、つねに誤解が存在します。

ですから私はこの誤解に賭けたのです。それは正直精神分析をあなたに説明するためではなく、むしろ反響の効果を試すためです。私はここで、ひとつの分析は各自に波動を起こし、それが本当に最大限肝心なことなのだと、示したかったのです。それはつまり、そうですね、精神分析をひとは説明したり、教えたりします。少なくとも精神分析の基礎や方法、問題を教え、ひとはその歴史を学んだりします。もう 1 世紀になります。ひとつの真の叙事詩です。お望みなら、数多くの偉大な賞賛すべき人物たちがいて、私は喚起することができたでしょう。

しかしもし私がそんなことは脇に置いたとすれば、それはたぶん、あなた自身が見に行くという気を起こさせたかったからでしょうね。

私が精神分析で用いられる臨床のカテゴリーについて何も言わなかったのは、多くの理由があります。おそらくそれはかつての明証性をまったくもっていないからでもあるでしょう。今日、これらのカテゴリーは、さきほど話したトラウマに合わせて考えられています。パロールが身体に課すトラウマのことです。そしてひとは「それとともにやっていく」様々な仕方を見ています。

そして臨床カテゴリーと一緒にやっていくべき、うまく解決すべきなのは、実践家のほうなのです。それはあなたの問題ではないし、分析家を見つけにいく側の問題ではないのです。

いったいでは、どのように分析家を見つけたらよいのでしょうか？

分析家、これこそ関心のあるカテゴリーです。というのも、精神分析家がいなければひとは精神分析をすることができないからです。フロイト自身さえ、この掟の例外ではありません。よく知られたエピソードがあります。彼が自分の夢を情熱的に分析していたあいだずっと、そして彼が最初期の患者たち、とりわけ女性患者たちに教わるがままだった頃、彼はひとりの友人と親密に手紙を交わしていました。その友人にフロイトはこころを打ち明け、この友人はフロイトにとってすでに分析家の機能をもっていました。ふたりはそうとは知らなかったのですが。

精神分析のこのすべての歴史＝話は、ここに由来しています。「分析家は、ある分析家のそばで形成される」。分析家は分析家を作り、前者が後者を任命し、その組織に加盟させます。そうです、それは内部で行われます。1 世紀のあいだ、ずっとこういうふうなのです。

世界のいかなる国においても、精神分析の免状取得試験は存在しません。これは偶然でも忘却のせいでもなく、それは精神分析とは何であるかの本質そのものに由来することがらです。ひとはひょっとして大学の試験が、分析家であるという能力を判断するものだ・・と、想像するのでしょうか？

もちろん、ひとは公衆のまえで誰かを分析することはできません。精神分析の実践は、もっとも内密な守秘に、あるひとが分析家に与える守秘にとっておかれています。それが改悪され解体されることなしには、この関係にほかの誰も、干渉できないでしょう。

分析の解釈が集められて、それが試験科目を作るのではないかと、ひょっとしてひとは想像するのでしょうか？

これも馬鹿げているでしょう。分析家が言うことは、わたしがさきほど描いたパロールの関係においてのみ、効力があるのです。分析的解釈は、それ自体では確証的なものではありま

せん。大事なのは、その中身なのではなく、抽象的な意味作用でもありません。その時—声高らかに伝えられた時—の、解釈が果たす機能のほうが大事です。ほかの何にも似つかない、この関係の文脈自体において、解釈を受け取る者のうちに予期できない効果をもたらすのです。

精神分析家の質は、公的な試験によって証明されることはできません。それはただ、事後的に、その実践の規則性という基礎に基づき、団体の枠において—つまり、一種非公開の、仕事をするコミュニティーが閉じられているところのことです—、保証されうるにすぎません。

それはこんな街のことで、多くあります。みながよく知り合っていて、症例がコントロール[スーパーバイズ]され、議論され、批判される。この必要不可欠な内部の仕事は、一般的に皆さんには不透明なものにとどまっていますが、それは守秘義務を果たすためです。それなくして精神分析はもう存在しないことになります。

ある日、同僚のひとりが自分にこんなお世辞を言ったと、ラカンは語っています。「あなたは生まれながらの精神分析家です」と。これは敬意のあらわれでした。しかし、ラカンは礼儀正しくそれを断りました。おそらく、この立場を保つのに、より多くのしかけをひとは持つでしょう。理想とのいくらかの距離、認められ、受け入れられ、固められ、きちんと同定されたものとの距離のことです。

むしろひとは分析のなかで、排除され、あるいは失敗したもの、さらに惨めなものへの、ある近接、隣接、シンパシーを確認します。ラカンは「それらのなかに、ひとはひとつの印をみる」と言っていました。それは理想の裏側にある、「くず」の印です。

しかし、いずれにせよ、生まれながらの精神分析家は存在しません。1910 年以降は、少なくとも歴史のこの地点で、分析家には自己を分析をするようにひとは推奨していました。それは患者が知るだろう現象の経験を、分析家自身ももつためにです。そしてすでに分析されたということが、分析家になる絶対不可欠の条件になったのです。

そしてラカンがやって来て、精神分析家を自身の分析の結果として定義しました。ひとが分析家であるのは、ひとが自分の分析によって自身の「行き詰まり（アンパス）」の外、出口を見つけたときです。少なくとも、そういう考えです。そこから、「パス」が来ています。

この名を私はここですでに発音しましたが、パスは今にいたるまで精神分析における前代未聞の実践を指しています。

ひとりの分析主体は、今度は自分が分析を実践することを始めるため、自身がやった分析によって自らを権威づけるまさにその時に、もし望むなら、組織によってえらばれた同僚たちに、自分の症例とその（分析家になる）理由を委ねることができます。彼らは慎み深くあるとどうじに細心の注意をもって、その証言について仕事するわけです。

彼らはなにを本当のものとして認めるのでしょうか？そのひとの症状がきちんと解読されたこと、諸幻想、さらには根本的幻想と呼ばれるものが白日のもと理解されたこと、欲望と享楽とがその実践にもはや干渉することがないということ、ですね。

そのとき、オリジナルな貢献というものが存在します。以下の問いの無限の書類に応えるものです。「分析家とは何であるのか？」。誰も、精神分析家そのものとは何であるかを、言うことはできません。

（定冠詞つきの）精神分析家は存在しません。精神分析家の本質は存在しません。精神分析家たちは存在します。彼らはひとりひとり到来し、各自が個別的な声をもち、その各自の分析の軌跡はつねに予見できないものです。

もし分析家が、本質的に最後まで分析された者、だとするなら、その場合、分析の育成とは、結局のところ分析的治療全体自体になってしまいます。それがラカンの警句の意味です。分析の育成は存在しない。無意識の形成物（育成）が存在するだけである、と。誰かを育成すること、それは、ひとをある理想に従わせて、同一化を課すことになってしまうでしょう。

ラカンは物知りである分析家を望みませんでした。それぞれの新しい症例において、オリジナルなもの、途方もないものを迎え入れるために、能力と知識を括弧にいれることを知っている分析家たちを彼は望みました。それが「ひとが知っていることを知らないことができる」という定式が要約しているものです。

エコール（団体）は、まさにそれらすべてのパラドックスが収斂する幾何学的な場です。そ

れは知の場ですが、「非―知」に秩序付けられています。というのは、「精神分析家とはどんなものであるのか」の知を持っているとは、誰もそこで主張しないからです。この知を、探すとどうじに打ち立て、発明しなければなりません。最終的にはそれに自己満足しないことが必要です。

ですから大学課程も、スタンダードな基準も、理想的な形式も、教育学も、支配も、ありません。そうではなくて、精神分析家にとってもっとも大事なものについての知の欠陥によって、つねに揺さぶられている、ひとつの環境に浸るということが大事なのです。各自ができるかたちでそこで泳ぎ、各自それぞれシステムD（その場でうまくやる方法を編み出すこと）を用いることです。それはもはや育成ではありません。育成の向こう側であり、それはひとつの生き方ですね。

そのような環境を確立するために、数が必要です。出版の複数性、交流の多様化が必要です。

ラカンのエコール、最良のエコールであるものにおいては、そうであるべきでしょう。